

回顧的調査が中心であり、それを補うために当時の中学生の作文など一次資料を扱っていますが、『鳥栖のつむぎ』は逐次的調査が可能であり、とても魅力的です。実際、逐次的調査は、どの程度可能なのでしょう。震災から 11 年が経って、当時の子どもがどのように振り返っているのか。とくに、『鳥栖のつむぎ』で母親が書いた物語を子どもは読んでいるのでしょうか。読んだうえで、どういう感想を持っているのかについても知りたいです。長くなりましたが、私からは以上です。

■コメント・ディスカッション

西城戸：では、次に、早稲田大学の嶋崎さんにコメントをしていただこうと思います。よろしくお願いいたします。

嶋崎：早稲田大学の嶋崎です。よろしくお願いいたします。きょうは、大変刺激的な時間をいただきました。ありがとうございます。私からは 4 点コメントします。これまでの話と少しずれている点があると思いますけれども。

今回、『〈つながり〉の戦後史』と『鳥栖のつむぎ』の 2 冊を取り上げました。まず大きな枠組みとして、『〈つながり〉』は、炭鉱閉山という職場とコミュニティの崩壊によって、人々が離散していく、散っていく過程で〈つながり〉がいかに機能したかを捉えている。それに対して『つむぎ』は、あちこちから自主的に避難してきた人たちが、受け入れ先に集住して、新たに関係を紡ぐ過程です。この 2 つの動きは非常に対照性があって、この点でも興味深いと思いました。

『つむぎ』の場合の受け入れ側の特性について少し考えたのですが、先ほどの笠原さんの話にもあったように、キーパーソンが存在が非常に重要であるということは、この本の中でも書かれています。それとは別に、本の中では特に焦点の当たっていないところで、集住した、雇用促進事業団住宅に集まって住んだということ、この点は実はすごく意味があるんじゃないかと思っています。これが 1 点目です。

鳥栖の場合には、「つばさ鳥栖」という 280 戸の雇用促進事業団住宅に集住しました。この雇用促進事業団住宅というのは、1959 年からの炭鉱離職者の雇用対策用に発足した、雇用促進事業団が各地に膨大に建設したものです。この『〈つながり〉』にも出ている船橋なども同じ 280 戸ぐらいです。つまり、10 棟ぐらいからなる集合住宅です。『つむぎ』でもこの団地の中で、つまり生の場、物理的な場が成立して、それゆえにでき上がってくる〈つながり〉、緩やかな〈つながり〉という部分は非常に面白いと思いました。

『〈つながり〉』の場合には、例えば広島事例も雇用促進事業団住宅に皆で移っていくわけですが、当時の雇用促進事業団住宅は、あちこちの閉山した炭鉱から集まってきて、いわばその中が縦割りなんですよね。なので、60 年代、70 年代の雇用促進事業団住宅の場合は、炭鉱ごとにとまとめたまま、分離したままの形だったのではいか。現在、当時移ってきた人たちが高齢者になって、最後、この住宅をどうするかが問題になっているわけですが、多分、分離したままだろうというのが私の推測です。

今、私自身の関心が、移住先での定着ということに広がっていて、雇用促進住宅での集住とそこでの〈つながり〉を考える上でも、この『つむぎ』での、受け入れ側の視点というのは非常に参考になりました。

2 点目は、『〈つながり〉』の話は、廣本さんも指摘しているように、当時の関係者に向けた整理という部分で、かなり成功談のようになっている、この点は留意していただきたいです。とはいえ、実際、大変成功したんだと思います。これは、やはり 1970 年という、高度経済成長期という時代効果があったことも、ここに参加していただいている方に理解していただきたいと思います。つまり、この時代の特性は、炭鉱離職者の受け皿として成長産業があったということです。本当にそれによって可能になったということです。

その後というのは、むしろ、スクラップ・アンド・ビルド政策の中で「ビルド」として生き抜いた炭鉱は、その後、80 年代、90 年代に大手がつぶれていきますが、そのときには、大変皮肉なことに、もうその受け皿はないので、多くが地元にとどまらざるを得なかった。その例が夕張であった。だから、なぜ尺別のように夕張がなかったかと言えば、もうそういう時代状況にはなかったということです。

そして、この当時、60 年代、70 年代の炭鉱閉山による離職者支援というのは非常に手厚い、失業保険、就

職紹介、移動費用の支給などが整っていて、公的セーフティーネットという視点でいうと、かなり十全に機能していたという点につながってくると思います。繰り返しますと、高度経済成長期という時代に特定のであったということ、これが2点目です。

それから3点目ですけれども、『つむぎ』は、子どもが幼いケースであって、そして母子避難ということ。このような、家族戦略における生活段階についてはきちんと押さえておく必要はあると思います。ちょうど3月11日が近づいてきて、今週のNHK「クローズアップ現代」では、もう少し年上の、ちょうど笠原さんが『〈つながり〉』ところで取り上げているような、当時の中学生たちが、今、振り返って当時のことを語っていますね。親子ともつらい思いを打ち明けられずに、双方が気を使い合っていたという。この様子をみて、これは『〈つながり〉』で語られていることと同じだなということを思いました。やはり家族戦略を考える上での生活段階、ライフステージの問題が重要だと思います。これが3点目です。

4点目は、危機的状況において活用される親族関係の特性は、これはさまざまに研究がありますが、やはり双系的、あるいは父系よりも母系的であるという点、これがこの『鳥栖のつむぎ』でも見えてくるといことは非常に重要だと思います。

そうすると、炭鉱でもそうなんですけれども、家族を考えていくと、危機的なときって親子関係が中心だと考えがちだけれども、むしろ夫婦関係から始まっているのではないか。夫婦に焦点を当てるのが非常に重要だと考えています。

炭鉱の中での拡大家族が、隣近所やコミュニティに開かれていくということを廣本さんはおっしゃっていますが、その契機は、やはりそこでの結婚なんですよ。姻戚関係で親戚がつながっていくからという。結婚がこの〈つながり〉の再生産の大きな軸だということは、もう少し私たちも意識的に焦点を当てたほうがいいと思います。

その点で言うと、尺別が閉山になって、みんないよいよ散るぞというときに、実にたくさんの結婚式があったという。ここで終わりだ、散っていくからにはここで結婚しておこうという、そういう新たな〈つながり〉があったというのも、我々が危機的な状況に遭ったときに、新たな〈つながり〉をつくる。そこに、若い人たちの結婚関係がある。この点も考えるとおもしろいと思いました。

ちょっと散漫なコメントですけれども、以上の4点で終わります。

西城戸：ありがとうございました。では、大倉さん、お願いいたします。

大倉：大倉です。よろしくお願いいたします。

2つの本を読ませていただいて、単純に並べて思ったのは、やはり自主避難者ってすごく孤独な選択といいですか、孤立した中で、いろいろ葛藤がある中で自分で全部決断を下さなければいけなかった存在だったんだなとよくわかりました。

その中で、そういう決断をしている人たちであるがゆえに、集まったときには、非常にポジティブなネットワークといいですか、大きな、強い意思を持ったネットワークができたのかなというふうにも感じられました。

昨今、自主避難といいですか、避難者が世界的に急増している中ではありますけれども、そういう中でも1つ考えられる話というのいろいろあるのかなというふうにも思った次第です。

2つの本を並べてみたときに、こういうふうに、狙いはこうだというふうに2つの本に書いてあって、一々読みませんが、基本的に同じものといえますか、非常に似た感じを持った本だということがよくわかるかと思っています。

いずれも、同じような故郷という話が出てきたり、移動の経験、避難、その中での物語という言葉が出てきているところが特徴だろうと思います。

皆さん、おふたりのご報告を聞いていて、僕も含めて、おふたりの報告を聞いてると共通点が、数多くがありそうだという議論が展開されていたように聞こえたんですけれども、それよりは少し、どこが違うのかということも含めて、ちょっと提示だけさせてもらいたいと思います。

まず、環境社会学の基本認識というか、背後仮説みたいなものですね。ここら辺は、何か環境汚染が起きましたといったときに、それが社会関係に非常に響くのである。そして、そういう社会関係への影響みたいなもの、あるいは社会関係の中で生じるいろいろな問題が、被害を増幅させるというポイントが1つあるかと思うんですね。

『鳥栖のつむぎ』というのは、実は、こういった基本認識を共有する本、つまり、この認識の延長線上にある本だというふうに読めました。ただ、当たり前ですが、『〈つながり〉の戦後史』には実はこの視点はないので、決定的と言えれば決定的な違いだなと思いました。

もうちょっと被害構造論の話をする、被害構造論というのは、ありがちな研究としては、被害をどんどん深いところに掘っていくという、深層に迫るとか、あるいは総体、全体像を明示するみたいなところにどんどん展開していきがちなんですね。それで、こんなところに被害が隠れていますよということを、紹介するとか、示すというところに強い意思が感じられるところなんですから、家族も、そういうところでも問題になってくる。例えば、一家の大黒柱が倒れた、それによって将来計画が立たなくなりましたというような話がよく出てくるわけですね。

ただ、こうやって総体というか、いろいろなもの、いろいろな被害の、これも被害、あれも被害と言っているうちに、家族はワン・オブ・ゼムになりがちなんところもあって、ともすれば家族の経験は被害の一部として終わる。スナップショット的に撮ってしまっただけということも少なくはないということなんです。

『鳥栖のつむぎ』の場合は、恐らく、家族、一部という形じゃなくて、まさに「家族の物語」に照準すると。そこに照準しつつ、掘り起こしていくというところにポイントがあるのかなと。この点が、『鳥栖のつむぎ』の独自の着眼と言えるところであると同時に、『〈つながり〉の戦後史』との、とても関心が重なるなというふうに思えるポイントなのかなと感じました。

あと、この本の中で時折言及される、「時間」という言葉が出てくるんですけども、関さん、廣本さんの解説の中にも出てくるんですけども。時間とともに見えなくなっていく、あるいは時間とともになかったことにされるというような側面ですね、被害の。そういうところを、被害、まあ影響ですね、捉えたいかな、捉えようとしているというところに、いわゆる自主避難というところから考えられるポイントがあるのかなと感じられました。

そういう意味で非常に関心も近くて、共通点多そうだというふうな研究なんですけれども、こうやって見ると、ちょっと違いも際立つのかなと思って紹介させていただいております。

私のほうから3つぐらい、コメントします。1つは、家族の経験みたいなところに焦点を据えることで浮かび上がってくることですね。それは、いわゆる閉山ドキュメントとか、あるいは被災者、避難者に焦点を当てた記録とか分析というのがあると思うんですけども、それらとどういうところが違うんだろうということですね。あるいは、いろいろな形で、社会あるいは社会の動きを明確化しようという、その分析というのが、こういったテーマをめぐっては行われてきたと思いますけれども、既存の研究だったり、ドキュメンタリーなんかと違うところとして、どんなところを映し出そうとしているのかというところが1つ。これは、おふたりに伺ってみたいというところです。

それから、次の2つも似ているといえますか、続きなんですけれども、1つは、こういう人生の中で恐らく二度とはなかなか経験しないというか、経験したくないであろう大きな出来事から生じた移動という経験が、その後の人々の社会関係に対する考え方、意味づけみたいなものにどういうふうに影響を与えていくかですね。

例えば、家族って大事だよみたいな方向に推移していくのか、それとも家族的な関係というのは、もうちょっと家族でやっていくのは無理かなみたいな方向にシフトしていくのか、いろいろな局面、文脈があると思うんですけども、そういう意味づけのレベル、考え方のレベルでどういう変化が生じた。その中で、例えば避難していた人が地元に戻ってきたときに、あの人、変わったよねみたいな、避難している間に変わったよねみたいな、よくも悪くも……みたいなところはあったんだろうかというようなところですね。

もう一つは、そういった社会関係の意味づけみたいなものについて、恐らく変わっていくとは思いますが、家族の意義みたいなものに対する意味というものについて、世代による差異みたいなものは何らか見られ

るでしょうか。これは、『〈つながり〉の戦後史』も含めて、ちょっと伺ってみたいところです。

あるいは、こういった意味づけの違いみたいなものから、何か経験的な一般化みたいなものが可能な説明・解釈みたいなのは得られるだろうか。

例えば、廣本さんのレジュメ、パワーポイントの中に、家族を「開く」とか、あるいは「戦略」という言葉が出てきましたけれども、これは一時的なものなのか、ピンクバードのオフィス、部屋にいろいろな家族が入ってきてドタバタやっているとか、あるいは炭鉱の閉山のときも、以前の暮らしは、いろいろな家族の人たちが周りで支え合いながら暮らしていたというようなところで、それも〈つながり〉という意味では1つの戦略だと思うんですけれども。そういう戦略みたいなものというのは、こういういろいろな経験、移動という経験を機にして何か変わっていくのか。避難者の場合であれば、そういう、開いたほうが楽しい、これからやりがいがあるという話で、みんなと一緒にやっていこうみたいな考え方につながっていくのか、それとも、これはあくまでも一時的なもので、時間とともになくなっていくものなのか、衰退しちゃうものなのかといったあたり、この辺を、家族あるいは社会関係に対する意味づけみたいなのところから、ライフコースあるいは世代間の差異を捉えられないかなというふうに感じられたという次第です。

私のほうから、以上3点をコメントさせていただきました。ありがとうございました。

西城戸：ありがとうございました。廣本さん、笠原さんという順番で、今のおふたりの報告に対して答えることができる部分と、逆に質問もあればお願いしたいと思います。

■避難者の〈つながり〉の場とその機能

廣本：嶋崎先生のコメントで雇用促進住宅への言及がありましたが、本にも書いてあるとおり、「つばさ鳥栖」というのは、鳥栖駅から徒歩5分ほどのところにあって、巨大な集合住宅です。佐賀県に避難された方は、佐賀市と鳥栖市に集中したんですけれども、その中でも「つばさ」に集まった方々がすごく多かったです。

その雇用促進住宅の前にすごく大きな公園広場みたいなものがあります。そこで子どもたちを遊ばせているときに、お母さんたちが「初めまして」じゃないですけれども、そういったことでつながり始めるということで、雇用促進住宅の広場の交流空間がすごく機能したということが言えます。

集合住宅ということもそうなんですけれども、「つばさ」では、ピンクバードセカンドホームを立ち上げた小柳さんという方が、避難された部屋の一室を開放して、支援物資を配布しました。自由に取りに来ていいですよというふうに部屋を開放したことが、お母さんたちの出会いのきっかけになり、交流につながりました。

もちろん、支援物資の部屋を開放していたからといって、全ての避難者が積極的に利用していたわけではないのですが、そういう「場」を通じて避難者の〈つながり〉ができたということは1つ大きかったと思います。

なので、避難者が集合住宅に集中することによって自助グループができましたし、そういったグループだけじゃなくても、一緒に遊ばせる機会がふえたということも、母親たちにとっては大きかったのではないかなと思います。

2つ目なんですけれども、『〈つながり〉の戦後史』のほうで、移動した後に就職先があった、受け皿があったということは、原発事故の避難者の背景とは違う点であると、嶋崎先生の話聞いて思いました。自主避難者の場合は、お父さんが一緒に避難をしたいけれども、新たに働く場を見つけることが難しいということで、お父さんは地元に残って、そのまま仕事を続けなくてはいけなかったというところ、そういったところの背景が全然違ったなと見ています。

当時、尺別炭鉱家族のほうでは、移動後の就職の紹介やあっせんがありましたが、自主避難者の場合はそういうものはありませんので、お父さんが動くことができず、母子避難にならざるをえなかったというのが自主避難の特徴であります。

ライフステージの面でも、『鳥栖のつむぎ』は『〈つながり〉の戦後史』に比べてすごく短期間しか調査していません。避難から数年しか見ていないので、その後のライフステージに避難がどのように影響したのかと

いったところは、なかなか追えていないというのが正直なところですよ。

『鳥栖のつむぎ』は、母親目線で書かれているものです。ヒアリングでは夫婦の関係も聞いてはいるんですけども、本に書くことができない部分が多かったと思います。この『鳥栖のつむぎ』は稀なケースというか、いい面を取り上げている部分も多く、夫婦や家族関係が壊れなかったという人たちです。ここに載っていない自主避難者、母子避難者の話を聞きますと、震災や避難で夫婦関係にひびが入ったということもありますので、これが全てではないかなと思います。

母子避難となると母親と子供の関係に目がいってしまいますし、お父さんへのヒアリングは結構難しく、表面的なことはしゃべってくれるのですが、なかなか深いところまでは聞きけなかったというのが、私の調査ではあったかなと思います。

■「家族」への焦点—家族戦略

廣本：大倉先生の質問は、家族の経験に焦点を当てることで浮かび上がることはということで、すごい難しい質問なんですけれども。「家族戦略」という言葉を、私の報告では使わせていただいたんですけども、「家族戦略」は母親と父親の意思が反映された戦略であって、とくに平時ではない時は、子どもさんとか、おじいちゃん、おばあちゃんの意味というのは、家族戦略にはなかなか反映されにくいんです。今回、「家族戦略」から自主避難者も見えますけれども、これは夫婦の戦略という捉え方になっているのではないかなと思っています。

『鳥栖のつむぎ』は6つの家族の物語をあげていますが、避難元も多様で、浪江の人もいれば、関東近郊から避難した人もいますし、その避難形態も違ったり、1次避難、2次避難の経緯も全然違いました。家族の物語を6つ取り上げることで、それだけ「家族戦略」が多様であって、それぞれのライフコースやライフステージもあったというところが、この6つを並べることで見えてきたところかなと思います。

なので、それぞれ「家族戦略」があったし、ネガティブな〈つながり〉も、ポジティブな〈つながり〉も、「家族戦略」の過程に凝縮されていたのではないかなと思います。

2つ目の、避難によって家族の社会関係にどのような変化が生じたのかということですが、当時、目立つ母子避難者や目立つ自主避難者は、それぞれ脱原発運動といった社会運動に参加されていました。母子避難者のお母さんが運動に参加して、それをクローズアップした場面が、新聞雑誌やテレビで取り上げられていました。他方で、『鳥栖のつむぎ』のお母さんたちはそういう運動には一定の距離を置いていて、ある意味で「普通」だったんですね。脱原発運動にコミットせず、事故を起こした東電に対する自分たちの考えをあまり表明しなかった。もちろん、内心ではいろいろ思っているのかもしれないですけども、それを表明したり、行動にうつしたりしていなかったというのが一つの特徴です。

避難後も、自分たちの生活をどうつくっていくのかということを中心にしていた人たちなので、避難をきっかけにがらりと社会関係が変わるとか、何か運動に参加するとか、いろいろな団体にコミットするとかという、そういったことはなかったと思います。

3つ目の質問は、2つ目の質問と関わると思うんですけども、この『鳥栖のつむぎ』のタイトルに、「震災ユートピア」と書いてあるんですね。だから、やっぱりこの状況だったからこそつくり得た関係とか、つながり得たということが、多分、この本で言いたかったことだと思います。なので、この本では、避難先でお母さんたちは避難者同士でつながったり、地元の人たちとさまざま関わったりして、そういったことにおいても「戦略」を打っていたと思うんですよ。自分の生活が維持されたり、生活しやすくするために、すごく広くつながっていました。その後、お母さんたちの中には、避難元に戻った人も結構いたのですが、その後、夏休みとかを利用して、鳥栖に遊びに来ていた人たちもいるので、避難者としての関係は続いているけれども、母親同士、ママ友みたいな感じではつながっていたというふう聞いています。

私からは以上です。

西城戸：ありがとうございました。司会ですが、原発避難者支援に関する研究をしているので、2点、付け加

えます。最初の部分で嶋崎さんが指摘されていた「集住できた」という点について、原発事故の避難者は民間住宅（みなし仮設住宅）に避難したため結果的に分散して住むことになったり、親族を頼って避難したため避難先を行政は全く把握できず、完全に孤立してしまった事例もあります。2つの書籍の対象は、時代背景は違いますが、移動した、避難した人が集まる場があったかどうかという点が、その後の社会関係や人の生き方に影響を与えたという点は共通していると思いました。

もう一点、「目立つ自主避難者」の話についてですが、避難者にもさまざまなタイプがありますが、マスコミの取材に応じる避難者の方は、だいたい同じ人であることが多くて、むしろ、それこそ社会学で議論しなくちゃいけないのは、「普通の人」。つまり、政治的な活動みたいな目立つ活動はしていないけれども、避難者として悩みながら生活をしている人が層としてどうなっているのかという点であり、『鳥栖のつむぎ』の人物はまさにそういう人だと思うのです。そして、2つの研究の共通点でもあるような気がします。

では、続いて、笠原さん、お願いしたいと思います。

■閉山後の「つながり」と子どもへの影響

笠原：コメント、ありがとうございます。嶋崎先生からのコメントの1点目について、雇用促進事業団住宅は、まさに炭鉱離職者対策であり、『鳥栖のつむぎ』では、札幌の雇用促進事業団住宅の話もありました。そこに集住していたことが、その後の定着、社会関係に影響を与えたと思います。『〈つながり〉の戦後史』で、船橋に移住した例がコラム2番にあります。そこでは、いろいろな炭鉱から来た人たちが縦割りで、炭鉱ごとに分離していましたが、町内会をつくって横のつながりを作ろうとしていました。興味深いのは、男性よりも女性は、ほかの炭鉱の奥さんたちとお茶飲み会をやって、いまだに続けているとのことでした。

2点目の時代効果については、尺別よりもあとに閉山した空知の炭鉱などでは、明らかに尺別と違う結果になっています。空知や九州の炭鉱の人からみると、尺別はよく知らない、異例な炭鉱とみられることもあります。尺別炭鉱は1つのヤマで1つの街を形成していた一方、空知はたくさんの炭鉱が集まって大きな炭鉱都市を形成していました。そうした条件の違いに加えて、空知は閉山のタイミングが遅く、尺別のような同郷会はほとんど形成されていません。故郷に対する考え方や望郷の意識が違うのです。

3点目の家族戦略における生活段階について、やはり『鳥栖のつむぎ』では幼い子どもが対象となっていました。『〈つながり〉の戦後史』ではあまり触れていませんでした。親の視点に立つと、中学生の子どもは進路選択の直前であったため、とくに気にかけていたようです。母親が支援していたということも尺別炭鉱の閉山でみられました。炭鉱閉山のときの小学生は、中学生と違って現在も同窓会などを開いていません。中学生という多感な時期まで炭山社会にいたことが、その後、彼らを引きつける要因になったようです。

4点目の危機的状況における親族関係について、尺別炭鉱という4,000人程度のコンパクトな街で、あちこちに親戚がいて、結婚してつながっていた。閉山のときに新たに結婚して〈つながり〉をつくることも非常に興味深いです。その〈つながり〉をもとに各地に移住して、移住先でも持続している。集団で移住した広島や船橋などがその典型です。

大倉先生からのコメントの1点目ですが、家族の経験に焦点を当てることで、公的な記録や地域史、郷土史というすでに編まれている歴史とどのように違うのかを意識しながら書きました。なるべく、多くのアクターへのインタビュー記録を使って書いています。私は子どもの作文をよく扱います。作文は読み手を意識した資料なので制約がありますが、全校生徒分の作文を用いて「お利口さん」の文章だけでなく、ある意味「外れ値」のような率直な文章をもとに、当時の中学生が何を考えていたのか、家族をどうみていたのかを再現しようとしています。大人だけの視点だけでなく、なおかつ遡及的調査ではわからないことを明らかにしようとしていました。

2点目の社会関係に対する考え方への影響は、炭鉱の子どもの視点でいうと、完結した閉鎖的な炭鉱街で生活していた子どもにとって、閉山は社会や炭鉱の外と触れる初めての機会であり、インパクトが非常に大きかったと思います。もちろん移動先で適応できたのか、できなかったのかということも重要ですが、歴史的出

来事に翻弄されるという経験が、その後の社会意識を醸成させるとか、教育制度に反抗的になったりという影響があると、調査をしていて思いました。尺別炭砦は、少し特徴的な教育をしていたことも、その後の社会関係や閉山に対する意味づけに影響があったのだと思います。また、移動後、子どもは高校・大学に進学、あるいは就職して、成人期に移行すると閉山の経験はほとんど潜在化しますが、のちに人生の節目で振り返ります。いま彼らは、高齢期に入って人生を再検討する段階にあるため、同郷会や同窓会に参加して、それぞれの考え方や意味づけを確かめ合っている時期です。

そして、3つ目の社会関係に対する意味づけが世代間でどのように違うのかについて、閉山当時の子どもは、移動直後は親や社会に対して不満や不平を抱いていましたが、移動後は移動先に慣れることが第一の課題ですから、そういう思いをどんどん潜在化させていきます。親に対する不満も次第になくなっていく。彼らも生殖家族を形成して、当時の親の大変さがわかるようになると、世代間の差異は小さくなっていくようにみえます。**廣本**：さっき、大倉先生の1つ目の質問で、家族の経験に焦点を当てることで浮かび上がることはというところで、ちょっと答えそこねちゃったんですけど、この『鳥栖のつむぎ』をつくっているときは、そんなに意識というか、問題としていなかったんですけど。さっき、家族の多様性がこの6つの物語から見えると言ったんですけど、ある意味で、自主避難、母子避難の性別役割分業みたいなのが、すごく濃く出ている本だなというふうに、今さらながらすごく思っ。その点は、自主避難、母子避難の避難形態というのが根底にあると思うんですけど、その辺はちょっと気をつけなくちゃいけないというのは改めて思ったので、追加させていただきました。ジェンダーが固定的になりがちですが、母親が専業主婦で、パートして、お父さんがメインの稼ぎ頭だったことは、母子避難が多かった要因でもありますので、その辺はちょっと目配せしなくちゃいけないのかなと思いましたので、お話しさせていただきました。

■「夫から子どもを奪う？」

西城戸：品田さんから質問ができています。では、品田さん、お願いします。

品田：きょうはとてもおもしろいお話を聞かせていただいて、私自身、この両学会にまたがっていた歴史が長いので、大変おもしろく聞かせていただきました。ちょうど家族の意味について、私も今、考えているので、そのあたりの質問をさせてください。

廣本さんには、母子の〈つながり〉のコラムのところで、自分の父親から孫を取り上げてしまった後ろめたさについて語られていたのですが、一般的には夫から子どもを奪ってしまったという話について、家族社会学的にはそっちが先かなみたいな感じもするのですが、その辺の発言はどんなふうになっていたか教えていただきたいです。

もう一つは、笠原さんへの質問ですが、本当に想像で構わないのですが、もし炭鉱閉山の時代に、こういう原発災害があったなら、母子避難というのはあり得たのかということについて、お考えを聞かせてください。それは、先ほちょっとジェンダーの話題も出しましたが、主体性というのが時代の変化の中でどのぐらいあったのか。母子で行くというのが、非常におもしろいというか、興味深い。今、欧米の家族と比較をしているのですが、母子避難が成立しているということで、その辺を考えて質問させていただきました。よろしくお願いします。

廣本：品田先生、コメントありがとうございます。

今、コメントいただいた、夫から子どもを奪ってしまったという話は、そういえば聞かなかったなと思いました。反対に、子どもから父親を奪ってしまった、子どもから父親を離してしまったということは結構ありました。夫に対しては1人にしてかわいそうみたいなのはあったんですけど、子どもを奪ってしまったという話はなかったと思います。

この『鳥栖のつむぎ』をつくる前に、『とすのつむぎ』という聞き書き集と、『とすのうた』という詩集を関

礼子研究室でつくったんですけれども、その中に、こういった詩があるんですよ。「僕の宝物」という詩で、「パパが久しぶりに会いに来てくれたとき、別れ際にパパの物が欲しいとねだる子ども　パパは使っていた携帯ストラップと食べ終わったフリスクを渡してくれた　それを眺めながら寂しそうにいつまでも握りしめていた」。

この詩からも、子どもからお父さんを離してしまったということは書かれていたのですが、その逆の、お父さんから子どもを奪ってしまったというのは、母親の口からは聞かなかったです。

■炭鉱閉山における母子避難の可能性

笠原：品田先生、ありがとうございます。母子避難はありえたのか、父親だけ炭鉱に残って、母親と子どもがどこかに行くことは考えたこともなかったですが、炭鉱労働者である夫も一緒に出て行くのではないかと思います。というのも、先ほどの報告の中で、炭鉱閉山はある程度予測ができたと言いましたが、産業が衰退して、炭鉱がいつかはだめになることはわかっていたり、炭鉱労働者がよそから移住してきた背景からして、原発事故のような何か大きなプッシュ要因がある場合、あえて夫だけが残って、母子で出て行くことは、あまり考えられないなと思いました。もちろん産業時間のどの段階で原発事故のような大きい出来事が起きるかにもよりますが、炭鉱はそうした特性がありますし、あとは時代的にも女性1人で働いて子どもを養っていくことが難しかったので、母子避難は難しいと思いました。

■ライフコース論から環境社会学は何を学べるか？

西城戸：ありがとうございました。ここで大倉さんをお願いしたいのですが、『〈つながり〉の戦後史』の議論や、ライフコース論から環境社会学が学ぶ点は何だと思われますか？

大倉：決定的と言えるかなというふうには思うんですけど、今回、『鳥栖のつむぎ』なんかはきっかけになると思うんですけども、1つの家族の歩んだ歴史だったり、家族とその周りの家族という視点ですね。ただ、家族は家族としてだけじゃない、周りも同じような経験をしている家族がいて。そういう中で、家族と家族の関係だったり、それが集まっていろいろな家族がいたりという、その全体の動きというのを追いかけていく作業があっていいかなということが1つ。

それから、今、おふたりの議論を聞いていて、かなり時代背景が違う中でもあるんですけども、家族の変化というか、家族が家族をどう考えるかということの変化というのは、確実にこの50年ぐらいすごく変化していることはよくわかると思うんです。絶対、炭鉱の場合、閉山した後は家族みんなで移るわけです。

今回の場合は、いろいろないきさつがあるにせよ、お母さんと子どもは移るというようなプロセスを踏んでいるので、それは非常に大きな——実は、単純な選択の自由みたいなところでの違いじゃなくて、そこに社会の大きな変化が何かしら絡んでいるのかな、関係しているのかな、言葉には全くならないけれども。という印象を持っていて、僕はさっき、家族に対する意味づけとか、考え方というのを考えたほうがいいんじゃないかというふうに言ったのは、例えばそういうもの、実際、何か経験をしたというときに、すごくインパクトのある出来事を経験して、移動しなきゃいけないということが起こったときに、じゃあ、それをどう感じたか。どう感じて、それはどういうアクションにつながっていくのかというときに、そこで家族を再定義したいということが、多分、起こっているんだと思うんですね、それぞれの人たちに。

そこで、その定義が非常に揺さぶられる瞬間が、その被災だったりすると思うので、そういうことが、今の時代とどう関連し合ったり、あるいはこれからどういう展開をしていくのかというのは、社会学者じゃないと見れないのかなというふうには思いました。

■移動に伴う「女性の主体性」と家族戦略

西城戸：ありがとうございました。急に振って申しわけありません。環境社会学の議論の中で、「家族」は研究対象になっているのに、「家族」という言葉や概念を用いていない。「家族」の議論は家族社会学だと勝手に思ってふしがあるのではないかと思います。しかし、『鳥栖のつむぎ』は、母と子の家族、父親の関係も含めた家族を恐らく対象としている議論であり、ライフコース論の分析枠組みを使った分析があってもいいのではないかと思います。例えば、ライフコース論の基本的な分析枠組みである A-P-C 図式は、『鳥栖のつむぎ』の対象であった自主避難者だけではなく、強制避難区域からの避難者に、それぞれ A-P-C 図式を用いた分析を行い、それらを比較することで、多様な避難者がその後、どのような生活を送ったのかといった分析が包括的にできるのではないかと思います。

嶋崎：今の環境社会学での指摘は、先ほど品田さんが指摘してくださった女性の主体性を考える、そこと全く同じ点ですね。それを考えるときに、例えば、まさに今、ウクライナもそうですけれども、戦争中の疎開は確実に母子避難ですよね。それがどれほど主体的だったのかということは、参考になるかなとは思いました。そこはかなり似ていますよね。相当にまだ「語り」が残っているし、そこを掘っていくと、おもしろいと思いました。

廣本：今、女性の主体性みたいなことを、大倉先生と嶋崎先生がお話しされていたと思うんですけど、炭鉱の移動のところを読むと、女性の主体性みたいなところって、もちろん夫の職業で動かなくちゃいけないんですけど、奥さんの、妻の意思とか、そういった考えとかって、ほとんど反映されなかったものなんですかね。

嶋崎：ほとんどかどうかはわかりませんが、まずは、次の就職先はどこかということなので。ただし、そこには、さまざまに就職相談等で、夫は1人じゃ決められないから夫婦で相談に行くのはたくさんあります。それから、80年代ぐらいになると、移住がうまくいった夫婦を、(稼働中の炭鉱の労働)組合が呼んできて、埼玉のこういう工場だとかだよとか、夫は1人でしゃべれないから夫婦で話してもらうことは非常に多いようです。夫の選択を夫だけがするのでなく、夫の仕事をふたりで決めているという、そこは大きいんじゃないでしょうか。夫が全てを決めているのではなくて、むしろ夫は地下の労働しかできないから、陸の上のことは全部奥さんたちがやっているという、そういう車の両輪だったというふうに理解したほうがいいと思います。そういう意味で、極めて対等な役割分担をしていたと、私は思っています。

廣本：わかりました。この自主避難者、母子避難者の避難経緯はさまざまあるのですが、避難するに至るまでの情報収集は、夫婦でやるパターンもあるし、お母さん1人でやるパターンもあるというところは、そこは重なるところであって、おもしろいと思いました。

あと追加で、先ほどの品田先生の質問のときに、性別役割分業の話をしたんですけど、それにはいい面も悪い面もあると思うんですけど、一面で、母親が父親から育児を託されたという視点も母子避難ではあったということを付け加えさせてください。

西城戸：ありがとうございます。今、嶋崎さんの話と廣本さんの話も含めて、自主避難者の主体性を考えていくと、自主避難者は母親主導で、旦那は全く理解がなく、嫁姑の関係もあって、自主避難者の家族が離婚をしてしまったという話をよく聞きますが、一方で、避難について相当夫婦で考えていて、特に鳥栖まで避難した人はかなり遠くまで避難しており、この避難生活を夫婦関係を継続しながら行うことは、家族全員の理解が必要になってきます。つまり、先ほど言った夫婦関係の部分から避難生活や、家族戦略を分析していく必要があるのだと思います。性別役割分業やジェンダーの議論を考慮する必要はありますが、2つの本の分析の起点は、家族、夫婦間の戦略という点だったかもしれません。

■子どもの主体性をめぐって

西城戸：一方で、笠原さんの報告があった子どものこと、子どもの主体性という観点はどうだったのか。閉山による移動に関して子どもの意思というものがどこまで反映されていたのか、子どもたちはこの移動の選択をどのように思っていたのか、笠原さんから話していただければと思います。また、廣本さんには避難をしたお母さんたちが、「自分たちが避難した」ということをお子さんに伝えるための本を作ったという話について、そのエピソードを話していただければと思います。

笠原：ありがとうございます。閉山当時の子どもについては、一応、教育委員会がいろいろ対策を取っていましたが、基本的には離職者への対策が第一であり、「親が大丈夫であれば子どもも大丈夫」という認識でした。尺別炭砦の閉山は2月ですから、中学3年生にとっては高校受験の直前で最悪の時期です。それよりも越冬対策で、早くに閉山して、つぎの冬が来るまでに出て行ってもらう。そこに子どもの主体性を尊重することはほとんどありませんでした。そういう点でも、子どもは非常に不満・不平を抱きますが、今になって振り返ると、炭鉱から大都市、成長産業都市に出たことで、自分の進学や就職の面でよかったこともあったと意味づけています。閉山を肯定しているわけではないですが、「あのときはいろいろ反抗したけど、親は本当に大変だったな」、「いまの自分があるのは閉山があったから、親が頑張ってくれたから」という語りを同窓会などでよく耳にします。

廣本：笠原さんの報告でも、追跡調査はどうなっているのかというコメントがあったと思いますが、きちんとした追跡調査はしていなくて、たまにお母さんたちと連絡を取って近況報告するぐらいで、ちゃんとした調査は全然していません。ただ、お母さんたちとお話ししていると、『鳥栖のつむぎ』に出てくる子どもさんって、震災当時のことをほとんど覚えてないんですね。小柳さんという方は、長男が高校1年生になって、4月から高2になります。彼は、当時、鳥栖にいたことはほとんど記憶に残っていません。

彼が中学校に上がって反抗期に入ったときに、この『鳥栖のつむぎ』を渡して、お母さんとお父さんがどれぐらいあなたのことを大切に思って育ててきたのかというのを伝えたくて、でも直接言うのは難しいからということで、この本を彼に渡したらしいんですね。

彼も、自分がこういう境遇にあって、お父さんとお母さんが避難の選択をして、自分と弟をこんなに思って守ってくれたんだということを感じたらしくて、その親子喧嘩は解決したというエピソードを聞いたことがあります。

私の報告の中でも触れたんですけども、震災当時の年齢によって、世代によって、震災や原発事故、避難への意味づけというのは違うし、時間の経過とともに、ちょっとずつ変化しているんじゃないかなというのは感じると思います。それが、今回の故郷喪失みたいなのところにも、回りに回ってつながっていくのかなと思います。

■原発事故による「被害による移動」の特殊性

西城戸：ありがとうございます。関礼子さん、コメントをお願いいたします。

関：どうもありがとうございました。『鳥栖のつむぎ』を取り上げていただきましたことに感謝申し上げます。今までの議論に関連するけれども、出てこなかった内容について、一言お話しさせていただければと思います。

日本社会の中で、定住というような感覚が非常に強いんですけども、移動というのが意外と頻繁にある。今回、炭鉱閉山に伴う移動、産業の都合で、家族が別のところに移動しなくてはいけない。あるいは産業の都合で、今現在も移動するというようなことが存在していて、そういう中で地域、疑似家族的な地域というのが壊されていくというような状況を学ばせていただきました。

多分、そのような地域の構造で、もし違いがあるとしたら、震災の東北、福島原発事故の東北では、もちろん、仕事の都合でそこにいたという人もいますけれども、結構、家族というのが、マキ、マケ、同族団みたいなどころで暮らしている。そういうような地域の中で、継ぐべき家とか、土地とか、あるいは面倒を見なくてはいけない親とかがいるようなところから避難しなくちゃいけなかったという、地域ベースでの違いというのが、もしかしたらあったのかなというふうなところを気づかされました。

また、同じ避難であっても、あるいは移住であっても、西城戸さんがご指摘くださったように、それは個々、それぞれの経過をたどっている。例えば、近くに避難した、新潟あたりに避難した方の中では、夫婦が通いを前提にして近場に避難するんですけれども、夫婦関係が悪くなった。なぜ帰ってこないのかということで、随分とあつれきがあったということで、最初にどこに避難するか選択が、その後にも響いているという状況もあったのかなと思います。

重要なのは、同じ移動であっても、原発事故の移動とその他の移動というのを同じにしていけないというところで、今、東京電力なんかが言ってるのは、移住してしまえば、それで被害なしというふうな主張を繰り返しているんですけれども、産業の推移によって、どうしても移動しなくてはいけない、そういうような、ある意味、苦しいですけれども、しょうがない移動というものも一方にあるけれども、原発事故の場合は、被害があつての移動ということで、そこだけは区別しておく必要があるかなと思いながら聞きました。

有意義な議論を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

西城戸：ありがとうございました。本当に、最後にまとめていただいて感謝申し上げます。最後のほうで関さんが話をされていた、原発の避難者の場合、強制的な移動という部分と、例えば都市化に伴って移動するとか、産業構造の転換に伴う移動というのも、非常に大きな移動ですけれども、その移動自体を同列に扱うことはできないはずだという指摘は重要だと思います。以前の環境社会学会のセッションでも、ある社会学者がそれを同列に扱った指摘をしていましたが、すごく乱暴な議論だと思います。

とはいえ、移動した後の定住ないし、そこでの生活をどうつくっていくのか、故郷自体をどう考えていくかという点は共通した議論があり、今回、初めて、環境社会学とライフコース論の議論を交えた企画をしましたけれども、ライフコース論の方々が、どれだけ環境社会学の議論が刺激になったかというのはわかりませんが、環境社会学側からすれば大変有意義な議論をいただいたかなと思っております。

平日の午後のお忙しい中、最大 36、37 人の方々に参加していただきました。感謝申し上げます。では、この辺で研究会は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。